

# 社会性の評価に関する基礎的研究 1 －主体的に気づく力の醸成－

菊地 紀子、上 憲治

## Fundamental study 1 about social evaluation

帝京短期大学

Noriko KIKUCHI, Kenji KAMI

Teikyo Junior College

### Summary

Here we report an effective way to cultivate students' own ability to determine their dresses and hairstyles being appropriate when participating in internships. Previously teachers instructed directly which ones are appropriate and which ones are not. But now teachers only show many cases of students' dresses and hairstyles in internships by using media, and instruct nothing. As a result of which students became to be able to judge by themselves.

### 要旨

本研究は、インターンシップ派遣指導に関し、服装や髪型などを教員から指示されて気づくのではなく、学生自身が自ら気づくという力について、メディアを活用したことにより、主体的に醸成されたことを報告している。

### 1 はじめに

短期大学の目的は、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成することを主な目的とする」<sup>1)</sup>とある。

また、就業力とは、大学設置基準によれば、「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」とされ、特に「生涯を通じた持続的な就業力の育成」は重要である<sup>2)</sup>。

OECDの国際教員指導環境調査(TALIS)によると、日本は子どもの主体的学びを引き出すことに自信を持つ教員の割合が国際的に見て低いと報告されている。また、社会的職業的自立のための指導法に関しても同様である。

先に示された文部科学省からの「短期大学の今後のあり方について」でも、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成を図ることが重要であると報告されている。

本学生活科学科生活科学専攻生活文化コース(以下"生活文化コース")では、就業力向上のためのカリキュラムとして、「キャリアルート」という考え方にに基づき、各自の興味・関心、将来設計を熟慮し、選択していくことができるカリキュラム構成である。図1のとおり、

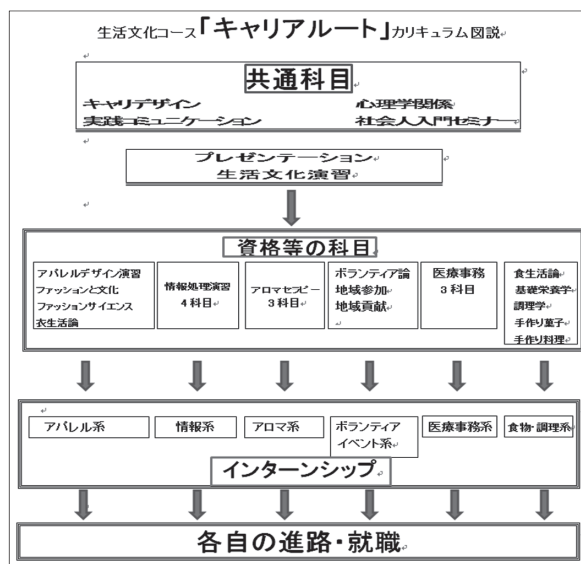


図1 キャリアルート

その中の大きな柱は、1年次の春休みに実施されるインターンシップである。1年次は各自の「キャリアルート」に基づき選択した科目を履修し、資格取得後にインターンシップに派遣される。インターンシップから就職活動、内定取得という卒業後の進路に関し、卒業後も自律して社会で生きていけるようにすることが、重要であると考えられる。

そこで、インターンシップに派遣されるための社会性の評価の観点として、表1のとおり、気づく力、聞く力、期限を守る力、作業力、発表力、報連相力、交渉力対応力、言語によらないコミュニケーション力について、学生に提示し指導した。

その中で今回は、自ら気づくことに着目し、インターンシップ派遣指導にメディアを活用したことにより、気づく力について主体的に醸成されたことを報告する。

表1 インターンシップに派遣されるための社会性の評価の観点

学生提示内容	社会性評価の観点
気づく力	指示されなくても気づくことができるか
聞く力	話を聞いてその通りにできるか
期限を守る力	期限を守るか
作業力	期限までに指示されたことができるか
発表力	プレゼンテーション授業を踏まえた発表ができるか
報連相力	報告、連絡、相談が適切にできるか
交渉力対応力	インターンシップ先や就職先に対して
言語によらないコミュニケーション力	メール

## 2 研究の目的

本研究の目的は、インターンシップ派遣指導に関し、気づく力について、メディアを活用したことにより、主体的に醸成されたかを明らかにすることである。

## 3 研究方法

調査の方法は以下のとおりである。

### ①調査期間

平成25年4月、10月、12月

### ②調査対象者 生活文化コース学生

平成25年度1年次13名

調査期間の4月、10月、12月の3回ともインターンシップ参考例評価書を提出した者

### ③調査の方法及び内容

前年度までにインターンシップに派遣された学生の写真を提示し、気づいたことを記入させたインターンシップ参考例評価書による

## 4. 気づく力

### ①気づく力とは

これまでインターンシップに派遣する際に口頭で指導してきた服装や髪型などについて、口頭で指導することをやめ、前年度までに口頭指導によりインターンシップに派遣された学生の写真を提示して、その違いに気づき自戒することができるかを、気づく力とした。

### ②気づく力の視点

前年度まで口頭で指導してきたことは、髪の毛の長さが肩より長い場合、髪を結んで肩より前に髪の毛が出ないようにすることであった。今回学生に提示した写真は、図2～12のとおりである。

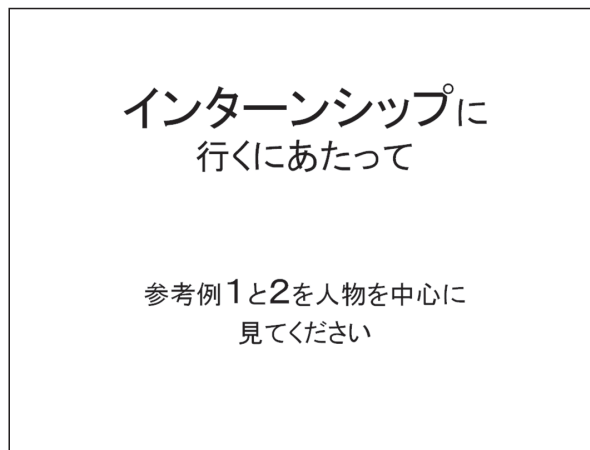


図2 提示したスライド (図2～12)



図3 提示したスライド参考例1



図4 提示したスライド参考例1

参考例1



図5 提示したスライド参考例1

参考例2



図8 提示したスライド参考例2

参考例1



図6 提示したスライド参考例1

参考例2



図9 提示したスライド参考例2

参考例1



図7 提示したスライド参考例1

参考例2



図10 提示したスライド参考例2



図 11 提示したスライド参考例 2



図 12 提示したスライド参考例 2

気づく力の視点は、この提示した写真の参考例 1 の学生と参考例 2 の学生の髪の結び方による印象の違いとした。具体的には、口頭指導には方法として問題があったことも考えられ、学生の受け止め方は個々に違い、参考例 1 の学生と参考例 2 の学生のように、髪は結んでいるものの、印象には大きな違いがでることとなった。参考例 1 の学生と参考例 2 の学生は、同じように髪は後ろで一つに結んでいるものの、参考例 1 の学生はしっかり結んでいないため、後れ毛などが顔にかかり、名刺交換やコピーを取る際、良い印象とはなっていない。反対に参考例 2 の学生は、しっかり結んでいるため、後れ毛などもなく、清潔感が感じられる。

このようなことに自ら主体的に気づき、インターンシップに向け自戒できることを気づく力の視点とした。

#### ③今回のインターンシップ派遣指導の違い

インターンシップ派遣に際し、これまでは口頭により指導を実施してきた。しかし、その受け止め方は学生個々で違い、こちらの意図したとおりに受け止めて

行動できる学生もいれば、そうではない学生もいた。これは、口頭という指導方法に問題があったことも考えられ、前年度までに口頭指導によりインターンシップに派遣された学生の写真を提示して、指導することに切り替えた。その際、口頭指導と同じように、教員側が指示するのではなく、学生自らが気づき自覚するための方策を考えた。

#### ④学生の気づきを促す方策

生活文化コースのカリキュラムの中に、春休みにインターンシップに派遣されることを最終目標とした「生活文化演習」という科目がある。この科目では、インターンシップに派遣されるための様々な演習を行い、社会性を獲得し、インターンシップに派遣される。

その中で、気づく力について、入学当初の 4 月、後期転籍者が入る 10 月、インターンシップ派遣最終指導を行う 12 月に、これまでインターンシップに派遣する際に口頭で指導してきた服装や髪型などについて、口頭で指導することをやめ、前年度までに口頭指導により、インターンシップに派遣された学生の写真を提示して、指導を行った。

多田<sup>3)</sup>は、「映像で線を必要以上に描きすぎたり、コトバで線をしゃべってしまっているような映像教材は、教師からみてわかりやすくできているが、子どもを動かす力はよわい」と述べている。映像により学生の気づきを促すことが目的であるため、4 月には何も言わずに見せ、10 月には参考例 1 と参考例 2 を比較するよう促し、12 月には良い例と悪い例と明言して見せた。

## 5. 結果

4 月入学当初に何も言わずに見せて、参考例 1 の学生について、髪の毛の結び方がだらしない、顔が見えるようにしたほうが良いなどと記述し、参考例 2 の学生との髪の結び方による印象の違いに気づいた者は、全体の 31% であった。10 月には後期から生活文化コースに転籍してくる学生がいるため、もう 1 度見せますと言って、参考例 1 と参考例 2 を比較するよう促して見せた。4 月入学当初に何も言わずに見せて、参考例 1 の学生と参考例 2 の学生の髪の結び方による印象の違いに気づいた者も含めて、参考例 1 の学生と参考例 2 の学生の髪の結び方による印象の違いに気づいた者は、全体の 69% であった。12 月のインターンシップ派遣最終指導時に参考例 1 と参考例 2 は、良い例と悪い例と明言して見せた結果、参考例 1 の学生と参考例

2の学生の髪の毛の結び方による印象の違いに気づいた者は、85%であった。

図13のとおり、4月入学当初からだんだんに上昇していた。

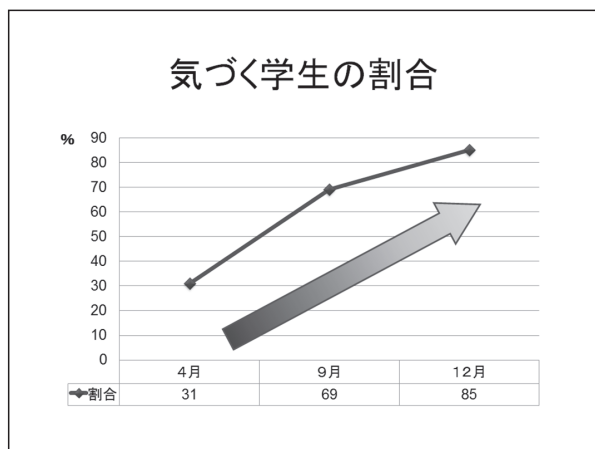


図13 気づく学生の割合グラフ

## 6. 考察

提示したスライドの1枚目には、「参考例1と2を人物を中心にみてください」と書いてあるにもかかわらず、4月入学当初は、69%の学生はインターンシップ先の予想や仕事内容の記述であった。反対に参考例1の学生と参考例2の学生の髪の毛の結び方による印象の違いに気づいた31%の学生は、高校卒業までに気づく力を身につけてきたことが考えられる。

10月にもう1度見た時に、参考例1の学生と参考例2の学生の髪の毛の結び方による印象の違いに気づいた学生は、38ポイント増加した。参考例1と参考例2を比較するよう促して見せたため、1枚目のスライドの「参考例1と2を人物を中心にみてください」と書かれていたものを見落とししたとしても、気づく学生が増えたものと考えられる。

12月のインターンシップ派遣最終指導時には、その違いに気づかないと派遣することができないため、良い例と悪い例と明言して見せたことにより、参考例1の学生と参考例2の学生の髪の毛の結び方による印象の違いに気づいた学生は、さらに16ポイント増加した。

4月入学当初から気づく力のあった学生は、10月の2回目には、またかというような多少の中だるみはあったものの、髪型だけではなく服装など細かいところにまで気づき、12月のインターンシップ派遣最終指導時には、インターンシップに向けての自戒の念や抱負なども記述されており、複数回見ることによって、その時の心情による印象の違いが示唆された。図14

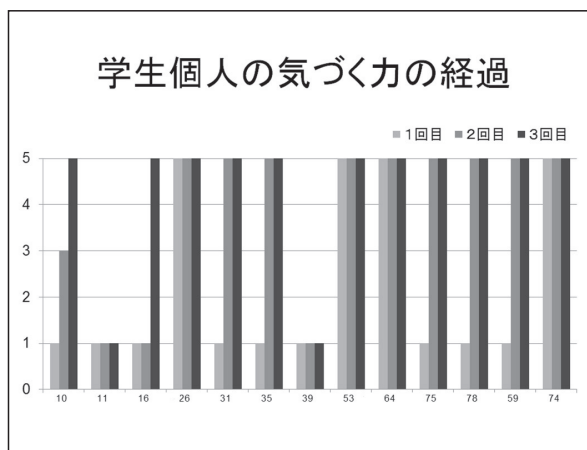


図14 学生個人の気づく力の経過グラフ

は、学生個人の気づく力の経過である。

4月入学当初の1回目では気づかなかった学生も2回目で気づいたり、3回目で気づいたり、回を追うごとに気づくことができた。

これは、平野ら<sup>4)</sup>や金子ら<sup>5)</sup>が、放送教材の継続視聴による児童自らが気づく学習効果を報告していることと同様である。

映像を見せる際もほとんどアドバイスすることなく、百聞は一見に如かずのとおり、メディアを活用し指導内容を映像として見せることで、学生が自ら気づき、主体的に気づく力が醸成されていったことが考えられる。

しかし、最終的に気づけなかった学生については、気づけなかった要因を探り、個別に指導し、今後に生かしたいと考える。

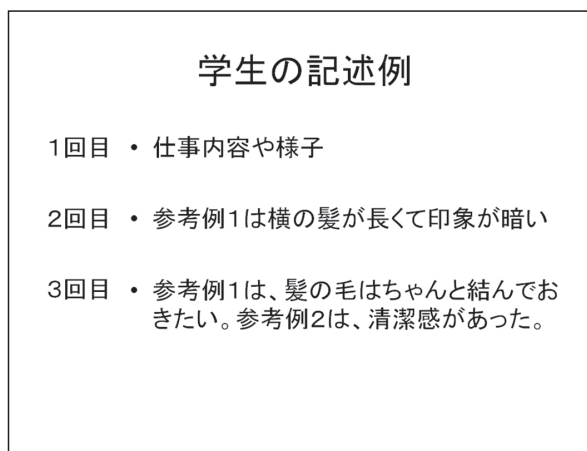


図15 学生の記述例

図15は、インターンシップ参考例評価書に記述された一例である。1回目は仕事内容や様子で人物に対

する記述はなかった。2回目は髪の毛には着目していたが、こちらが意図している所にまでは気づいていない。3回目でやっと参考例1と2を比較して良い悪いを記述していた。

また、図16、17は、メディア利用により気づく力が醸成された後に、インターンシップに派遣された学生である。一目瞭然で参考例2の学生のように、きちんと髪を結び清潔感が感じられる。

### メディア活用により気づく力の醸成後にインターンシップに派遣された学生



図16 気づく力醸成後に派遣された学生1

### メディア活用により気づく力の醸成後にインターンシップに派遣された学生



図17 気づく力醸成後に派遣された学生2

## 7. おわりに

これまで髪の毛の結び方については、地域のお祭り参加やインターンシップ派遣に際し、口頭で指導していても、学生個々にその受け止め方は違っていましたが、写真というメディアを通し客観的に見ることで、具体的に知ることができたのではないかと考える。

また、昨今学生の基礎学力低下が嘆かれて久しいが、学力と同じくらい社会に出てからの社会人としての社会性に乏しい学生も増えている。就業力向上のためには、学力も必要であるが、社会で生きていく上での学

力以外の力も必要と考える。

兒島<sup>6)</sup>の報告の中に、「一方的に伝え守らせる指導方法より、学生自らが気づき、学ぶことがいかに重要かを痛感した」とあり、「身近な存在である同じ学生から得るものは、教員たちが一方的に伝えるものよりはるかに力強いことも窺われた」とある。また、学習に限らず就職支援についても、篠原ら<sup>7)</sup>の報告にある「主体的な学習」の支援が、効果的にできたのではないかと考えられる。

今後は、学生同士の話し合いなども取り入れ、さらに学びが深まり定着することを期待したいと考える。

平成26年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査によれば、大学等の就職内定率は、平成26年10月1日現在で、短期大学は26.7%と文部科学省から公表された。生活文化コースでは、今年度同時期35.3%である。全国的な調査と関東にある大学では、関東にある大学の方が、内定率は高い。しかし、2年前の平成24年度も同時期33%であった。前報の教育研究報告集第3号で報告したとおり、インターンシップから就職へという指導方針が定着してきたことも考えられる。

これからも、大学での学びはもちろんのこと、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培う支援をしていく指導計画の改善と、推進に努めたいと考えている。

## (参考文献)

- 1) 学校教育法第9章第108条、昭和22年4月1日施行
- 2) 大学設置基準、平成22年2月改正、平成23年度施行
- 3) 多田俊文：第四章 映像の教授科学、映像と教育 - 映像の教育的効果とその利用 -、pp.131-154、1990
- 4) 平野大二郎、金子実、佐島群巳、菊地紀子：放送教材活用による視聴能力の形成 - NHK学校放送の継続視聴利用による心の育成とコミュニケーションスキルの向上 -、第21回日本教材学会研究大会発表論文集、pp.110-111、2009
- 5) 金子実、平野大二郎、佐島群巳、菊地紀子：放送教材活用による豊かな心の育成 - NHK学校放送の継続視聴利用による心の育成と臨床的アプローチ -、日本教材学会第21回研究大会発表論文集、

pp.112-113、2009

- 6) 兒島 尚子：“気づかせる”からはじめるマナー教育、大阪樟蔭女子大学研究紀要第2巻, 225-229, 2012
- 7) 篠原文陽児、張春梅：教員養成大学における授業「情報処理」の目標と課題に関する基礎的研究、第12回日本教育メディア学会年次大会発表論文集、pp.166-167,2005